



砥鹿神社奥宮荒羽々気神社

宗
佩
の
神
Siveeyeah



アラバハキ神社

見渡す限り平らな畑。遠くを山が囲み、青く霞んでいる。そこに土の農道が通っていた。緩い轍がある。轍の畝に蒲公英や車前草おわばこや白詰草などの雑草が生えていた。道往くと途中に大木があり、よく繁った葉陰の下に、祠の大きいもののような、又は小さなお堂のような、睿佩神社がある。

神社と言ったって、ただ、ぽつんと小さな社があるだけだ。鈴も賽銭箱もない。手水場などあるはずもない。境内と言える土地などさらさらない。

閑寂としていて、蕭然たるようにも見え、何か象徴的ですからある。

やがて冬になり雪降り積む。

畳の部屋で待っていた。凜とした直線が屹然と聳えるかのごとき畳縁（たたみべり）の文様は桝菊縁や亀甲紺ではなく、松の葉の濃い深緑の麻に、金糸や濃い真紅の絹が織り込まれ、鳳凰紋と龍文が太陽のように絡んで丑をなし、獅子や犀や象や麒麟や猿が躍る紋様。二月の雪に紅梅の襖絵がずっと開かれ、松月に桜華爛漫の障壁画に違い棚や床の間、文机のある座敷。

枯れた痩身だが矍鑠たる白きカイゼル鬚の八十八、眼をかつと見開き唐突に問う、

「作麿生（ぞもさん）」

「な、何ですか」

かくも慌てふためく長身の若者、黒艶の髪を椿油で固めた筋骨隆々の巨漢、顔つきも精悍なるも、どこか愚鈍の面相を湛え。されど老人は赦さず。追撃の手は止まず。

「作麿生っ！」

目を丸くしつつも若者は、

「え、ええっと、せ、せっぱ、説破……、で、よかったンでしたっけ？」

構わず詰め寄る。

「眞神の本懐ほんぞ奚なんぞや」

喉を動かし、唾を呑み込む。

「……た、義よしきと、お、以おもうを爲す……でしたよね？」

彼は古来この地方で人口に膾炙し、古典に幾度も記述のある有名な言葉で返す。普遍妥当な回答というわけだ。しかし、

「空疎愚劣蒙昧！」

「えっ、そんな莫迦な。絶対無比の定説です。なぜですか？」

「口尖ぞ。腹の底から申せ」

「あゝ、そおーゆーコトですか……」

「作廢生っ」

「はい、はいっ、……あつ、いや、その、説破!」

「義しきとは奚や」

「わかりませんよ。胸に正しいと感じることを義しいと信じるしかない、……と思いますが、ためですか?」

「*hic* (ふーむ、呸)、では胸に正しく感ずるとは奈何」

「ええっ! 何でしょうか。もうホントにわかりません。わかりようもない!」

「さよふ。さこそ事実、真実也。^{なれ}善哉、善哉」

そつ言って手に持っていた盆を差し出す。備前の茶碗に抹茶が仄かな湯気。

「喫茶去(きつさこ)。お茶を召し上げ、の意」

そつ言われても^{いまだましゅうへいかんた}麓 周平敢太は余りにも唐突な展開で、何の事だかわからず、呆然とするばかりであった。

長い髪をオールバックにし、頬のこけた大男、二十歳だが、もっと老けて見える、破れたジーンズに重たいラムの B-3 leather flight jacket を緩く羽織る周平敢太。拳の大きな荒武者のような男、いや、実際、祖先は荒ぶる戦士だった。武門の家柄である。

麓と書いてイシダタミと読むが、麓家は真神族の中で官位を持っていた。真神の官位は大和朝廷への漸進的な臣随とともに大宝の律令をまねたものだが、咎められることも懲罰されることもなく、外異の礼として黙認されている。

麓は少初位下で、^{しょうしよいげ}官位の中では最下位であった。もっとも官位があるということは平俗の家に比して真神に功績あるわけで決して恥すべきではない。真神では十五等級の勲位(武勲の位)と併せて複雑な位階が設けられている。

少初位下勲十五等近衛下々次、麓周伏の^{しょうしよふく}長子滅尽平伏の^{めつじんへいふく}長子敢闘斗の^{かんたうと}長子周平敢太と云うのが正式な呼び方である。家柄は代々武門の家で、主家は赤門家(従五位下勅授勲六等少将下次)であった。ちなみに赤門家の君主は平衛家(従三位勲二等近衛大将)である。

現在、真神郡と言えば真神(まがみ)・畝邨(ほむら)・龍吞(りゅうどん)・龜鹽の四つの村と、難久簔(なぎくさ)町のことであるが、かつては赤門戸(あかかど)町や安房(あわ)市、大雨

(おおあめ) 市を含む山と海に囲まれた地域であった。それが紀元前七百年に神籬彌真斗カムイヤマトが開闢した真神真邦マギミシンボウの勢力圏であった。

これはよくあることで、古代日本において越こしの勢力圏(阿彦王の国)が律令制の下に前中後(越中・越前・越後)に分断されたのも同様の処置である。他にも吉備きび(備中・備前・備後)や毛野けのしもずけ(下野・上野)、総ふさ(下総・上総・安房)などに例が見られる。

さて、そういう訳で真神にはどこか懐かしい異国の風がある。それぞれの一家は神社を持つ。むろん茅葺や檜皮葺などの神女清厳なる社殿は持てない。「なあんだ、小さな祠なら普通の日本の家にもお稲荷さんを祀ってあったりするではないか」と反論されるかもしれない。しかし祠を開ければ古代インドやメソポタミアの神ではないかと思われるような、しかし全く名の知られていない神々が極彩色で祀られていたりもするのだ。そうではない自然木の無垢な神像を祀る家もあるが。

正月などは、周平寛太の家の者はまず家の神の社へ赴く。斎佩神社は畑の中によく繁った大樹の下にあった。

雪を取り除いて道が開かれている。

老若男女が震えながら歩く。周平敢太は曾祖父周伏を支え、先頭にいた。

周伏は斧槍を両手で頭上に挙げて(このとき敢闘斗と周平敢太が持ち上げるのを援ける) 斎佩の神に礼拝し、塩と酒とを捧げる。

周平敢太の家は惣家の分家の一つで斧槍分家という。斧槍分家は名のとおり斧槍を主武器とする武家で、ハルバード Halberd と呼ばれる戦斧を使う。彼らのハルバードの特徴は柄だけで5m近くもあり、その先に三日月型の刃渡り1mの斧が背中合わせのように二つ附いていることだ。長柄翼刃大霹靂裂神斧(ちようえよくじんたいへきれきれつじんぶ)と伝承され、普通は刃の形から連想される「大こもり」が通称だった。

家神が終わると、今度は当主とその下の全ての長子が本家に赴き、氏神を斎祀いじきる。即ち当主である周伏とその長子減尽平伏とその長子敢闘斗とその長子周平敢太が行くのである。

物見の附いた櫓のごとき長屋門には数多の惣家の者が列をなし、参集さんしゅうしていた。

本家当主、梵秋月長雨涙しゅうげつちやううるい(少初位上勲十五等近衛下次)は覆鑢たる八十八歳。

正儀武装して集まった一族は大広間で酒を振る舞われる。酒はむろん清酒だ。清らかな薫り高い木の柵に注がれ、家の順に賜盞される。そして武屋敷の奥にある檜無垢の一の鳥居から杜の表参道に入る。次に黒塗りの二の鳥居があり、石段を上がると黒塗りに緑の彩色のされた三の鳥居がある。楼門と廻廊が現われ、その最も奥に流造の御社がある。黄金の装飾金具と黒塗、檜皮

の屋根。

祭神は神籬^{カミヤ}亞^ノ厨^ノ御^ノの分御魂、籬^{カミヤ}羅^ノ妻^ノの分御魂、火神^{ヒノカミ}禽^ノなる迦^カ楼^ロ羅^ノ大神。

ちなみにその後は臣従の関係を結んだ主家へ赴き、さらにその後は真神の王家へ逝き、王家の御社、那魂なる御大御社を詣でるのである。

よって、大晦日元旦の数日前に臣・主・王が時間を調整し合い、無用な混乱混雑を起こさないようにする習慣があった。冒頭の一コマはその際に起こった出来事、周平寛太が事前の打ち合わせのために贅家本家の当主を訪れ、摩訶不思議な禅問答の洗礼を受けたのである。

お話はここで終わりだが、贅佩という聞きなれない言葉について、ここで一言言及しておこう。

これに関しては、幼少時の周平敢太が父敢闘斗に尋ねたところによれば、「叡智を剣のように佩いて身に備え、攻守の武器とするから」と言われたものだが、実は間違い。古代真神語の「イエハ」が語源で、「神なる武威は統べる」だ。もともと砂漠の民であったアンシヤル家（平衛家）が海の国^{ミノ}（蓑之国）に涉って、籬^{カミヤ}家^ノの王に仕えたとき、平衛家の家臣であった贅家の武人らが王からかように讃えられた故事に基づく。

「秀でたるかな武門の家、アンシヤルの家に鋭き斧槍あり。雷霆の如く地を割り、海を裂くイシユダーミ（贅家）家の神なる武威は敵を無みし、海陸空を統べる靈威」

黄昏時であった。

仕事を終えて帰って来た周平敢太は蟬^{セミ}蟬^ノの背のようにしっとりと昏い漆黒のシルエットを濃く深いオレンジ色の背景に浮かび上がらせて佇む大樹と社とを眺める。魂から湧き上がる懐かしい感情、遺伝子に刻まれた古い記憶が臭いや触感のごとく甦る。それは古代、爬虫類であった時代にも遡る、脳幹から醸し出されるかのような、強く根源的な感覚であった。